
歪ンダ愛。

桃蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歪ンダ愛。

【Nコード】

N0746L

【作者名】

桃蘭

【あらすじ】

ソノザキユウヤ

園崎雄也は学校内の人気者で優等生。

男女共に憧れの的だった。

そんな雄也はずっと前から学校のマドンナ、タキグチユイナ滝口唯奈に恋をしていて…

序章（前書き）

初ホラーです。

ホラー好きですが、描写が苦手です…↑

何かご指摘がありましたら、レビューにお願いします。

序章

「…なあ、知ってるか？」

「あ、雄也の事だろ？」

「雄也が“人殺し”、だろ？」

「あの雄也がなあ…」

ああ、言ってる言ってる。

「ねえ、雄也くんさ…殺しちゃったんだよね…」

「あたし、雄也くんの事好きだったのに…」

ああ、こっちでも言ってる言ってる。

やっと雄也がいなくなってくれた。

狂った雄也はとてもおもしろかった。

あの娘は犠牲になったけど。

そんなにあの娘が好きだった？雄也。

君はこんなにも愛されていたのね。

ああ、可哀相な雄也。

でも、安心して欲しい。

俺が…雄也になってやるよ。

雄也になってさ、皆に愛されて。

皆が雄也を忘れるぐらい皆の人気者に、そして優等生になってやるよ。

逆にお前を見返してやる。

だから安心して

早く牢獄の中で死んでくれよ。

バイバイ、皆の雄也。

バイバイ、俺の雄也。

キャラト言ウ名ノ仮面

「雄也くんっ、おはよっ」

「おはよ」

「おはよ、雄也」

「おはよ」

いつもと変わらない、いつもと同じ光景。

なあ、退屈しないのか、お前ら。

心の中でそう呟きつつニコニコと笑顔を振り撒く俺、ソノザキユウヤ園崎雄也。

一人称は僕。

ま、人の前でだけ。

なんか優等生っぽいだろ、『僕』って。

だから『僕』。

実際、優等生キャラを演じ切ってる訳だが。

しかも人気者という称号付きで。

努力の賜物だろ？

学年トップをずっとキャラの為に守り続けてんだから。

キャラを壊すわけにはいかない。

キャラを壊したら俺には何も残らない。

人気者って称号も消されてしまうかもしれない。

キャラを壊すなんてのは却下だね。

「園崎くんっ!!」

ああ、また来たよ。

バカな女子。

女子ってほとんどがバカだと思う。

ちょっと優しく、ちょっと微笑むだけで恋心を抱くんだから。

ああ、恐ろしい。

「ん? どうしたの? 間山さん」

「今日の放課後って…空いてる??」

適当に顔と苗字を合わせて優しい笑顔で対応する。

そこら辺は凄く徹底してる。

てか、放課後って呼び出しだよな。

怠いんだけど。

どうせ

「好きなのっ!!」

とか上目使いでコクってくんだろ？

それぐらいわかるっての。

「うん、空いてるけど？」

「じゃっ、じゃあ放課後屋上に来てくれないかなあ…?」

「うん、わかった。行くね」

「…っじゃっじゃあっ!!」

そう言ってニコニコしながら間山は友達の方に走って行った。

遠くから

「悠梨よかったじゃん!!」

なんて声が聞こえる。

悠梨ってさっきの奴の名前か。

てか、放課後に屋上って有りがちだな。

やっぱバカだ、あの悠梨って女。

柔らかく断っておこう。

と言っても嫌われないように。

「よっ！雄也っ！」

そんな事を考えていたら後ろから声をかけられた。

その声の主はクラスメイトの桐沢孝平キリサワコウヘイだった。

「よっ！孝平っ！」

桐沢自身は俺を親友だと思い込んでるらしい。

だから、その立場を保つ為に親友のフリをする。

親友のフリして利用する。

ダメだったら捨てる。それだけ。

俺にとっては“親友”とか“友達”とかいらない。

出来れば欲しいのは…そう。

『恋人』。

それだけでいい。

でも、恋人にするなら滝口さんがいい。

滝口唯奈さん。

俺がずっと片思いして来た娘。

高校入ってから2年間ずっと片思いをして来た娘。

どんなにウザい女にコクられても滝口さんに変な噂が流れないように優しく断って来た。

滝口さんを手に入れる為だったらなんでもしようと1年の時に決めた。

でも、もともとかなり恋に奥手な俺。

全く手が出せない。

何たって滝口さんは学校のマドンナ的存在。

狙ってる奴なんて沢山いる。

どうすれば滝口さんと…

「…聞いてんのか？雄也」

「…あつごめんっ！何の話だっけ？」

「はあゝっ。さっき話してたのって、隣のクラスの間山悠梨ちゃん
だろ？」

「ああ、そうだけど」

だから何だ。

桐沢はいつも俺の思考を途切れさせる。

正直、ウザくて迷惑。

「悠梨ちゃん超モテんだぞ!？」

「…だから？」

「だから!! その…お前みたいに見た目よかったらなあ」と

見た目???

見た目の問題か。

確かに桐沢はカッコイイ訳じゃない。

じゃあ俺は???

俺は見た目がよかったから女子にギャーギャー言われんのか???

まあ、確かに何度も

「ジャニーズ顔だよな」

とは言われたが。

なら、単に女はバカばっかだって証明出来んだな。

結局は男も男。

可愛い奴がいいんだろ。

キーンコーンカーンコーン…

「あっ！！やっべっ」

予鈴が鳴るとやっと桐沢は自分の席に戻ってくれた。

やっぱ俺は桐沢が大嫌いだ。

そんな事を考えながらふと、滝口さんの後ろ姿を見る。

俺の席は1番後ろ。

滝口さんは横の列の1番前。

それぐらい遠くても滝口さんが見れるだけで俺は、幸福感に浸れる。

あのロングで甘いシャンプーの香りがする髪。

そしてすらっと伸びる足。

理想の女子ってのはまさに滝口さんだと俺は思う。

「授業を始める」

いつも暑苦しい数学の教師の声で俺はしょうがなく黒板の方を見た。

キャラト言ウ名ノ仮面（後書き）

気付いた方もいるかも知れませんが、雄也くん、某アイドルグループのメンバーの名前からいただきました。

友達がその人のファンなんですネ（笑

何となく出て来ましたー^^

因みに私は雄也くんのキャラ大好きですネ^^

邪魔ナ存在

俺はちゃんと間山悠梨を柔らかくフった。

『あたし…雄也くんがす…好きなのっ!!』

『ごめんね、間山さん。僕、ずっと片思いしてる人があるんだ』

『そう…なんだ…ごめんねっ』

『僕の方こそごめんね。でも…友達としては、ダメ、かな…?』

『うっうんっ!!雄也くんと友達でいれるならそれがいい!!』

『ありがとう』

思い出すだけで吐き気がする。

『友達でいられるなら?』

バカだろ。

友達でもなんでもなくただの同級生だろ。

気が付けば自宅の前に着いていた。

ガチャ

「ただいま」

俺は家に入った。

…ん？

靴が二つ。

男物と女物。

男物の靴はたぶん双子の弟、幸也^{ユキヤ}だろう。

じゃあ女物の靴は？

母親がまだ帰って来ているはずがない。

あいつはパートで夜9時迄帰って来ないのだから。

じゃあ、幸也の彼女…？

「幸也あーっ！！」

聞き覚えがある女の声が聞こえる。

タッタッタ

軽やかに階段を下りて来た。

そこには…

「滝口…さん…？」

「あっ！雄也くんっ！！こんにちはっ！！幸也知らない？？」

ニコニコと笑顔で話し掛けてくる滝口さん。

幸也…？

何で呼び捨てなんだ？

幸也とは出身中学も今のクラスも違うのに。

それに何で俺ん家にいる？

俺が呼んだ訳じゃないのに。

「さっさあ…僕にはわかんないや」

「唯奈、ここっ！キッチンにいるっ！」

幸也の声がする。

唯奈？

何故呼び捨てにしている？

タッタッタ

キッチンから走って来る足音がする。

…幸也だな。

「あつ、雄也お帰り！」

幸也は軽いノリ。

…ムカつく。

「あのさ、幸也と滝口さんは付き合ってるの？」

かなり直球な質問。

どう出る、幸也。

「うん、付き合ってるよ。俺と唯奈は」

幸也はニコニコしながら答えた。

ますますムカつく。

幸也は俺が滝口さんに片思いしている事を知っている。

知っていながら付き合ってるなんて許せない。

♪♪♪♪

その時、幸也のケータイが鳴った。

「あつ、メールだ」

そう言って幸也はケータイを開いた。

「じゃあ僕は自分の部屋に行くね。二人でごゆっくり」

俺は引き攣りそうな笑顔をキープして、自分の部屋へと向かった。

トントントン

ゆっくりと階段を上がる。

後で幸也を問い質さねばと思いつつ。

♪♪♪♪

調度、部屋の前に着いた時に俺のケータイが鳴った。

邪魔ナ存在（後書き）

雄也くん、性格黒いゝ^^

て、そうしたんだけどね（笑

友達にこの話をしたら

「怖っ！！でもおもしろそうだね♪」
って評価が！

ありがと、Hちゃん。

愛してるぜ、Hちゃん。↑

でも、Hちゃんのケータイだ&ここに来れないのです。

残念。

今度メールで本文送ってあげよう！！

皆様、是非レビューをくださいm
〔 m

神様ノメール

ガチャ

俺は部屋のドアを閉め、メールを確認した。

発信者は…

「恋の神様…？」

登録したはずの無い名前だ。

てか、“恋の神様”って何だよ？

幸也と滝口さんを別れさせてくれんのか？

俺と滝口さんを付き合わせてくれんのか？

訳わかんねえや。

俺はケータイを閉じた。

♪♪♪♪

ケータイを閉じたらまたメールが来た。

「誰なんだよっ！」

俺は声を荒げた。

桐沢か、誰か。

どうだっていい。

イライラしてメールを開いた。

「またかよ…」

そう言いつつも俺はケータイを開いた。

誰から届いたのかはわからない。

でも、もしかしたら滝口さんと…

そんな希望もうっすらではあったが、心の中にあった。

まず、1通目。

— — — — —

恋の神様

20**／04／28 18..11

— — — — —

貴方ハ滝口唯奈ガ好キデスカ？

—
—
—
—
—
—
—

「ナメてんのか、これ」

思った事が口から出た。

俺は滝口さんが好き。

なのに何だ。

まるで俺が本当は滝口さんが好きではないような内容は。

若干ムカつきつつ2通目を開いた。

—
—
—
—
—
—
—

恋の神様

20**／04／28 18..19

—
—
—
—
—
—
—

幸也カラ奪イタクハナイデスカ？

————

奪えるもんなら奪いてえよ。

滝口さんが欲しい。

欲シイ欲シイ欲シイ欲シイ欲シイ欲シイ欲シイ欲シイ欲シイ
欲シイ欲シイ欲シイ欲シイ欲シイ欲シイ欲シイ欲シイ欲シイ
！！

いっだって俺は幸也に譲った。

俺の大事だった宝物も。

親からの愛情も。

全ては幸也の体が弱かったから。

だから滝口唯奈は欲しい…

もういいだろ？幸也。

お前はもう弱くない。

親の愛情なんか必要無いから滝口さんを俺にくれよ…

なあ、幸也ああああ！！！！

この時の顔はたぶん誰にも見せた事の無いような顔をしていただろう。

♪~~~~♪~~~~

またメールが来た。

たぶん『恋の神様』からだろう。

俺は躊躇いなくメールを開いた。

~~~~~

恋の神様

20\*\*／04／28 18:27

~~~~~

滝口サンヲ奪ウオ手伝イヲシマショウカ？

~~~~~



手伝ってくれる…？

本当か…？

…そうか。

返信して聞けばいい。

何故それに気付かなかったんだ。

俺はメールの返信をした。

— — — — —

園崎雄也

20\*＊／04／28 18..32

Re..

— — — — —

本当に手伝ってくれんのか？

手伝うにしてもどうやるんだ？

——————

…送信。

何故だか俺は心が高ぶっていた。

滝口さんが手に入る。

ずっと一緒にいられる。

喜びの感情が満ち溢れている。

それと一緒に負の感情も溢れている。

幸也が憎い。

幸也なんか消えてしまえ。と。

本当に俺の心は醜く歪んでいるものだ。

♪♪♪

またケータイが鳴った。

…電話？

桐沢から電話だった。

たぶん電話に出たらずぐにはメールが見れない。

なら出ないでおこう。

そう思ったらぴたと止まった。

…と思ったら、

♪~~~~♪~~~~

また鳴った。

心の中で舌打ちをしつつケータイを見る。

見た瞬間舌打ちの意味が無くなった。

『恋の神様』だった。

—————

恋の神様

20※※／04／28 18..41

—————

ハイ、お手伝いシマスヨ?

方法ハ、私ガメールデ貴方ノ行動ヲ指示シマス。

ソレニ従ッテ貴方ガ行動スレバ滝口唯奈ハ貴方ノモノ。

— — — — —

メールで行動を指示？

そんな簡単な事だったのか。

『恋の神様』の指示に従って行動すれば滝口さんいや、唯奈が俺のモノになる。

ハハハハッ！！

幸也から唯奈を奪ッテヤル…

クツクツクツクツ

部屋には雄也の笑い声が高らかと響いていた。

## 神様ノメール（後書き）

雄也くんが狂ってしまった…

…と言っても予定通り。

憧れの洗脳っぽくね。↑

今後雄也くん、変態化はしませんが変人化します、確実。

雄也くんはどんどん狂いますよ♪

頑張って更新するので是非読んでくださいね！

## 神様ノ初指示メール

今朝、『恋の神様』からメールが来た。

無論、滝口さんを俺のモノにする為のメールだ。

内容はこんな物だった。

――――

恋の神様

20\*＊／04／29 06..41

――――

今朝、学校へ早く行ッテクダサイ。

ソシテ、滝口唯奈ノ下駄箱ノ中ニアルスリッパヲ切り刻ム。

滝口唯奈ガ登校スル前ニ下駄箱ノ影ニ隠レテ、滝口唯奈ガ登校シテ来タラ、サリゲナク慰メテクダサイ。

――――

正直、かなり読みにくい。

片仮名だらけというものも見づらいものだ。

だが、さほど難しい指令でもない。

いつもは8時20分頃に登校するのを滝口さんがくる前、即ち、7時50分前に行って、スリッパを切り刻めばいい。

少し良心が痛むが少しの代償はしょうがない。

そう思いつつ歩いていたら学校に着いていた。

今の時間AM7..31。

まだ滝口さんは来ていない。

下駄箱には誰もいない。

校内にいるのは無駄に早く来た生徒か、部活中の生徒か、早めに来る教師。

絶対にバレない。

ガチャ

俺は核心して滝口さんの下駄箱を開けた。

：そこにはスリッパがあった。

これを切り刻んで：

クツクツクツクツ

笑いが込み上げて来た。

滝口さんが来たらさりげなく近寄って慰める。

滝口さんは俺に好意を持ってくれる。

クツクツクツクツ

ザクツ

俺はスリッパにハサミを入れた。

案外容易に切れるものだ。

ザクツザクツ

軽快な音を立ててスリッパは切り刻まれる。

ザクツザクツザクツ

とうとう切り終わった。

さあ、下駄箱の影に隠れよう。

俺は下駄箱の影に身を潜めた。



## 神様ノ初指示メール（後書き）

次回ですね、滝口さん視線に入ります。

滝口さんは雄也くんの思惑通りになるのか…？

それは秘密秘密秘密

秘密のアッコちゃん♪↑

次回もお楽しみ♪

## 誰カノ悪戯

何故だろう…？

いつもなら「一緒に行こっ♪」ってメールをくれる幸也が「今日は別々に行こう」ってメールをして来た。

昨日、雄也ちゃんと鉢合わせして空気がおかしかったから…？

そのせいで喧嘩して幸也が元氣なくて会いたくないとか…？

あー、わかんないや。

「おっはよ、唯奈」

そんな事を考えてると後ろから親友の鈴木千里スズキセンリに声を掛けられた。

「あ、おはよ、千ちゃん」

「あれえ〜？？いつもみたいに彼氏さんと登校しないのお〜？？」

千里はあたしの肩を人差し指でツンツンとつついて悪戯っぽい笑顔を見せる。

時々見せるこの顔が少し怖いんだけど、根はいい娘。

だから親友でいられたんだとあたしは思う。

「あ、喧嘩した？？」

「喧嘩なんかしてないから!!」

「自棄になってえ」

「自棄になんかになってないから!!」

こんな事でも笑える友達なんて初めてだった。

千里は信頼できる。

あと、幸也も。

だからあたしは疑ったりしない。

「でも雄也くんはぜったいあげないからね」

「あたしには幸也がいるから!雄也くんをもらう事なんて無いよ」

千里は小学校の頃からずっと雄也くんに片思いしているらしい。

それは凄いと思う。

だってあたしと幸也が付き合い出したのは2年になったついこないだから。

「あたし、自販機で飲み物買いに行くから先行くねっ」

「じゃあ」と行って千里は校舎の中に走って行った。

「あたしも教室行かなきゃ」

小さく呟いて自分の下駄箱を開ける。

ギーッ

時代を感じさせる音を立てて下駄箱を開けた。

中にはあたしのスリッパがある

はずだった。

下駄箱の中に入っていたのは…

あたしの物であろうズタズタに切り刻まれたスリッパ。

「…何これ」

昨日の帰る時には普通に入れた。

誰かがやったの…？

「滝口さん、どうかしたの？」

そんな時に雄也くんがやって来た。

「なんでも無いよっ！！」

あたしはとっさに切り刻まれたスリッパを隠した。

「なんかあった？幸也と喧嘩しちゃったとか」

「大丈夫だよっ！！」

必死に笑顔を作った。

かなり限界が近い。

「…ん？何それ」

「…！！！！！！」

気付いた時には雄也くんはあたしの所まで来ていた。

瞬間、雄也くんは悲しそうな顔をした。

「…滝口さんはなんで僕に隠そうとしたの?？」

「え…?」

まさかそんな事を言われると思わなかった。

「もしかして幸也に心配かけたくなかった…?」

コクッ

あたしは頷いた。

「…そっか」

「…ごめんね」

ギュッ

「えっ…?」

雄也くんはあたしをそつと抱いた。

「僕は言わないよ…。だから安心して」

「…ッ」

不意に泣けてきた。

なんだか雄也くんの腕の中は暖かくて雄也くんなら話してもいいと思った。

「今朝は幸也と一緒に来なかったの？」

「うん…ヒクッ…幸也が今日は別々で行こうって…」

「…そっか…。幸也、何でこんな時に一緒に登校しなかったんだろ  
うね…」

「…わかんない…」

「幸也が無理だったら僕に言ってよ。そしたら一緒に行くからさ」

雄也くんは優しい笑顔で囁いた。

今は幸也よりも雄也くんが信頼出来てしまいそうな気がした。

## 誰カノ悪戯(後書き)

亀更新すみません(汗

この頃忙しくて…

言い訳すみません<〔〕>

合唱練習とドレス作りとで忙しい日々。

かなり不定期ですが頑張って更新します!!



## 偽リノ喜ビ

「幸也が無理だったら僕に言ってよ。そしたら一緒に行くからさ」

「…ありがと」

滝口さんはこっと微笑んだ。

その笑顔が俺はずっと欲しかった。

ずっとずっと待ち続けた俺に向けての滝口さんの笑顔。

それと同時に心の中で俺は思い付いた事を決行する事を決めた。

「じゃあさ」

「ん？」

「いつでも連絡取れるようにアドレス交換しない??」

そう。

あのメールが来てから思い付いた事。

“これを機にメアド交換”。

これで滝口さんに一歩近付ける。

「うん、いいよ」

ほら、OKしてくれた。

滝口さんは優しいし、何より今、滝口さんは傷付いてる。

そんな時に誰かが慰めれば味方だって思うだろ。

人間って面白いよなって思う。

「赤外線で送るね」

…来た。

俺は滝口さんのアドレスを手に入れた。

「じゃあ僕も赤外線で送るよ」

「あ、来た」

「なんかあったら気軽にメールしてよ。相談乗るからさ」

「うん、ありがとう」

「あ！！そうだ、今日は僕のスリッパ使いなよ」

「えっ…でも悪いよ…」

「僕は学校のやつを借りるから大丈夫」

俺は優しく微笑んだ。

考えれば、俺のスリッパを滝口さんが履いて返してもらって事は滝口さんが履いたものを俺が履けるわけだ。

俺にとってそれだけでも幸せだ。

滝口さんに学校のスリッパなんか履かれたらそんな幸せも無くなってしまう。

「そっか：なんかいろいろありがとう。雄也くんってホントに優しいね」滝口さんに学校のスリッパなんか履かれたらそんな幸せも無くなってしまう。

「そっか：なんかいろいろありがとう。雄也くんってホントに優しいね」

また滝口さんは微笑んだ。

「あ、じゃあ借りて行くねっ！ありがとう」

そう言って滝口さんは教室へと向かった。

ふと、余韻に浸った。

やっている事はいじめとか犯罪なのかもしれない。

でも、今の俺には歪んでしまったちっぽけな喜びぐらいが調度いい。

ただ、ただ俺は滝口さんが欲しいだけなんだ。

そんな気持ちで俺は職員室へと向かった。

## 偽リノ喜ビ（後書き）

正直、今かなりの病み期に突入した（してしまった）感じですが…

スランプ気味&軽く鬱気味に…

更新速度も不定期ですみません（泣

こんなグダグタになりつつありますが今後とも読んでもらえるとても嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0746/>

---

歪ンダ愛。

2010年10月11日04時43分発行